

# 社会心理学は何を解明しているか

岩月 拓 (Taku IWATSUKI)

名古屋大学情報科学研究科、京都大学文学研究科

本発表では、外的妥当性 (external validity) の確認に関する議論や実践を手がかりに、社会心理学の探求はどのように行われ、その結果得られる知見はどのような特徴を持つか、という問題を考察する。

社会心理学では、日夜、巧妙な実験によって興味深い現象が見いだされ、さらに他の実験によってその現象が頑健性を持つことが示される、というようなことが起こっている (ように見える)。このような事態をどう理解すればよいだろうか。とりわけ、実験室において発見、確立された現象は、現実世界 (real world) においてわれわれが日々経験している日常的な心理現象とどのような関係にあり、それに関して何を教えるのだろうか。

実験室環境 (setting) の人工性 (artificiality)、実験参加者の大学生への偏り、タスクや測度の抽象性などのゆえに、その成果は現実世界における現象に関して多くを教えない、という批判が社会心理学実験につきまといってきた。実験室環境で得られた結果の現実世界に対する一般化可能性は外的妥当性と呼ばれ、社会心理学研究の持つべき性質の一つと、多くの場合、考えられている。

実験室研究の結果は外的妥当性を持たない、という批判に対して、幾人かの社会心理学者は反論を行ってきた。それらの反論のポイントは、第一に、実験結果は操作化のレベルで外的妥当性を備えている必要はなく、それがテストする理論を通じて外的妥当性を持てばよいのであり、第二に、社会心理学実験がその人工性や抽象性によってアприオリに外的妥当性を持たなくなるわけではなく、実験が外的妥当性を持つかどうかは経験的な問題である、というものである。実際に、このような立場から、外的妥当性の有無をメタ分析などによって検討する研究も行われてきた。

本発表では、外的妥当性に関する議論や経験的研究の分析を通じて、社会心理学の研究プロセスやその成果の特徴を考察し、以下のことが示される (予定である)。社会心理学の研究プロセスとその成果は、日常的な心理現象やその観察に基づいてわれわれが習得する素朴心理学カテゴリー (感情、性格特性、態度、動機付け、偏見など) を前提した上で成り立つものである。